第 11 回 6/27 「Revolution～私たちの望むものは～」

後藤 由多加（ごとう・ゆたか）先生

株式会社フォーライフ ミュージックエンタテイメント
代表取締役社長

1971 年、早稲田大学在学中にユイ音楽工房を設立。吉田拓郎、かぐや姫、長渕剛、BOØWY らを手がける一方、
1975 年、井上陽水、泉谷しげる、小室等、吉田拓郎らとフォーライフレコード（現フォーライフミュージックエンタテイメント）を設立。
1982 年、同社社長に就任。
1986 年、アーティストの著作隣接権擁護のため、（社）音楽制作者連盟を設立、理事長として様々な権利等の問題に取り組む。
1993 年、アジアの音楽文化交流を目的とする(財)音楽産業・文化振興財団を設立、副理事長して多くのイベントを開催するなど、その活動は多岐に渡る。

《講義概要》

1970 年代に吉田拓郎や井上陽水などを世に送り出した、株式会社フォーライフミュージックエンタテイメント代表取締役社長の後藤由多加氏が、音楽業界の変遷や現状についての講義を行った。

講義ではまず、後藤氏がプロデュースした CD「Revolution～私達が望むものは～」に収録されている曲などを流しながら、音楽のあり方について話した。その中で、1970 年代の時代を反映した音楽や、人と人が向き合って作る音楽の魅力に触れながら、デジタル化が音楽に与える影響について解説。音楽業界は、その現実と向き合ってどのように進むべきなのか、問題提起を行った。

また、上辺だけの楽しさだけではない、エンタテインメントの本質的なあり方を示すとともに、「時代のリアリティ」を自分で見つけてスタイルを創るべきであることなど、数多くのメッセージを投げかけた。中でも、「若いうちにやらなければできなくなることがある」という訴えは、受講生が今すべき事を探すきっかけとなった。

《受講生の感想》

●後藤先生がおっしゃる学生にしかできない事、学生にしかないアドバンテージは何かというお話が一番印象的でした。他の既存のものについていくのではなくて、自分のオリジナリティを探すことが、生き残っていく為に必要だと感じました。今日は何曲か３０年ほど前の音楽を聞く機会をいただいたわけですが、メッセージ性がとても強いと感じました。その時代時代によって音楽もどんどん変わっていくのがよくわかりましたし、ある意味全く違うものにも感じられました。流行を知る事も大事ですが、ガッツをもって向きあっていく事も大事だと思います。

立命館大学・映像学部・2 回生

●自分の親が学生運動の世代で、“ 私たちの望むものは ” などの歌をよく歌っているし、話を聞かせてくれるので、この “ 歌 ” が持っているメッセージを教えられてきました。学生の持っている力というか、可能性、「時代のリアリティ」というものを、自分達が生きている中でつかみとっていきたいと感じました。

立命館大学・産業社会学部・1 回生

●今日聴かせていただいた曲は、歌詞が優しく、心に残る曲ばかりで、すごく良かったです。特に、吉田拓郎さんの曲は今まであまり聴いたことがなかったけど、心に訴えかけるものがありました。

立命館大学・産業社会学部・1 回生

●今日の講義で一番印象的だったのは、人間の内面的なひずみからクリエイティブなものが生まれるという言葉でした。すごく印象的だった。

立命館大学・産業社会学部・3 回生

●デジタル化したことで今まで作ることができなかった音楽を作れたり、曲を作りやすくなったという利点はありますが、それ以上に悪い影響がたくさんあることがわかりました。先生がおっしゃった「ダウンロードや違法サイトでとって曲を聞くのは、これまでお金を出して１曲１曲しっかり聞いていたのと比べると音楽に触れるのがうすく、浅くなる」っていうような言葉がとても印象に残りました。たくさんの音楽に触れられるのはいいことですが、この状況はどうにかしなければならないと思いました。

立命館大学・産業社会学部・1 回生

●私は高校から音楽科に通い、音楽を学んできたのですがクラシック音楽の世界は自分でスタイルを作っていくというよりは伝統を重んじる要素が強いので、今日先生が講義でお話して下さった “ 時代のリアリティ ”“ 自分のパーソナリティを作る ” ということはとても新鮮に感じました。大人ができないことができるのは今だけだということが良く分かりましたし、私もこれからどんどんアクションを起こしていこうと思います。

同志社女子大学・学芸学部・2 回生